

## 自分の言いたいのは何か・・・・・・・・・

520

萩原良昭

「ああ、弟さんの方ね。うちの子が、お兄さんには、色々お世話になつて、まあ、どうも、どうも。」と先生は僕を見て言った。

「はい、お願ひします。」

「それで、どうしたんですか。」

「はい、蜂にさされた様です。」

「どれどれ、あれあれ。これは放つて置いたなあ。早く、処置せんといかんがな。手がくさるぞ！」

先生に叱られながら、血清の様な注射で、つかくて、大変痛いのを、直接、右手の患部に打たれた。思つた以上に、事態は深刻みたいで、怖くなつた。僕は考えた。昨日はだめだったが、今日は確実な材料がある。

帰り、包帯された痛い左手を右手でさわりながら、

家に帰り、本町のおばどこへ行く様な様子をした。

521